東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十七卷　第四號

昭和三年十月一日發行

論叢

財産より生ずる無形所得の課稅　法學博士　神戸正雄

形式社會學概念　文學博士　米田庄太郎

租稅負擔及び經費の國際比較　經濟學博士　汐見三郎

時論

老齡船の運用とその處分　經濟學博士　小島昌太郎

說苑

明治初年に於ける大阪通商會社　經濟學士　菅野和太郎

學と實踐　經濟學士　福井孝治

雜錄

大阪の文化と造幣局　經濟學博士　本庄榮治郎

私營質屋業の概況　經濟學士　楠見一正

大阪市の人口增加に就て　經濟學士　武田長太郎

法令

鐵夫勞役扶助規則中改正

雜錄

大阪の文化と造幣局

本庄榮治郎

一

大阪は德川時代に於て既に天下の臺所なりと稱せられ全國の富の七分は大阪に在りと評せられた程であつて、我國經濟の中心であつたことはいふ迄もない。明治の新政府が大阪の富豪を味方に取り込んだことは誠に賢明なる政策であつた。大阪に造幣局が置かれたことも、この大阪の經濟的地位といふことが大なる關係を有することと考へられる。

維新前における我國の貨幣制度は甚だしく紊亂してゐた。そこで幣制を統一して我國の財政經濟的發展の基礎を確立する必要のあつたことは勿論である。然し明治の初年に於て造幣局は單に貨幣の鑄造をやつたといふばかりでなく、各種の工業、交通機關はもとより西洋新智識の輸入について大なる關係を有せしものであり、現今の大阪が商工業都市として非常なる發達をなした基礎は造幣局によつて築かれたものといふも差支はあるまい。否我國全體の近代的發達に對して造幣局は實に大なる貢献をなせしものといふことが出來る。

二

さて造幣局は明治二年二月太政官に屬して設けられたが、同年七月大藏省に屬して造幣寮と改稱し、十年一月更に造幣局と改稱して今日に及んだものである。その初めは恰も香港の造幣局が創立幾何ならずして廢局となりし際であつたから、香港にある造幣器械を購入し、その局長たりしキンドル(W. Kinder)その他の技術者を招聘して造幣事務を開始せしものである。

造幣局の建築についてはウオートルス(T. Waters)といふ者が居つて之れが建築や器械のことを指圖した。煉瓦は國外からも持つて來たが泉州堺東湊に於て

新に爐を築いて製造し、遠く廣島で製造せしめしものも用ゐた。處が煉瓦を積む者がないので左官を雇つて煉瓦を積ませ、ペンキを塗るには在來の塗師屋を雇ふといふ有樣であつた。何分西洋建築は始めてのことであるから、類似の仕事をやつてゐた者を集めて漸くその仕事に當らしめたものである。四年の二月十五日から三日間盛大なる開業式を擧げ多人數の西洋料理の饗應があつたが、その料理人は横濱や神戸から招致したといふことである。このとき既に造幣局の人は新調の洋服を着け、斷髮廢刀してゐた。世間ではまだ洋服を着けたり髮を切つたりはしてゐなかつたのである。

三

造幣局の仕事は勿論貨幣を造るにあるが、その他に色々の仕事をやつてゐる。先づ述ぶべきは硫酸製造のことである。貨幣鑄造材料たる金銀地金を分析精製するには硫酸が必要である。そこで造幣局では明治五年四月に硫酸製造所を設けて自ら之を製造することとした。我國に於て大仕掛を以て硫酸を製造したのは造幣

局が始めである。この硫酸製造の技術は先づ印刷局に傳へられ、後、民間にも及んだ。この製造所は十八年十一月に至り之を大日本製藥會社に貸付け、ついで之を硫酸製造會社に轉貸したが、二十四年五月に失火のため燒失し、其後三菱會社の手に移つた。創業以來明治十八年の閉場に至る迄の十四年間に各種硫酸合計一千七百四十四萬六千封度を製造した。而してこの硫酸は悉く九州及北海道產の硫黃を原料として製造したものである。

次には曹達製造所のことである。これは十四年二月から事業を開始した。主として炭酸曹達を製造したものであるが、十八年十一月硫酸製造所と共に民間の會社に貸與し、其後三菱會社の手に移つた。この兩製造所は卽ち今の大阪製煉所の前身をなすものである。

又造幣局では反射爐を創設して初めて銅の鎔解法を行つた。この技術は先づ砲兵工廠に傳へられ、ついで東京の鑛業家古川市兵衛氏、三菱製煉所等に傳へられた。

又英國より器械を取寄せて石炭瓦斯を製造した。造幣局創業の時より局内、工場及び街路に點燈し外國人の官舍等皆瓦斯燈(煤氣燈)を用ゐてゐた。市中ではそういふものなき時であるから非常に珍らしがられたものである。當時瓦斯燈六十五基、其他室内の分が六百二十一あつたといふ。其後市中から瓦斯の供給を受くるに至つて瓦斯製造所は廢せらるるに至つた。

又骸炭(コークス)製造所もあつた。即ち明治四年四月より高島炭を用ひてコークスを製造し、金銀鎔解用に供した。石炭は維新前にも多少大阪へ輸入され、明治初年には淀川汽船で新に石炭を需用したが、造幣局の設置により巨額の石炭を要することとなり、大阪への輸入一ケ年に百萬斤に達するに至つた。明治七八年には造幣局の事業が漸く發展したため一ケ年四五百萬斤の消費を見るに至つた。即ち石炭が大阪で大量消費せらるるに至つたのは、即ち造幣局が設けられてからのことである。

其他金銀試驗の方法についても古來の試金石に依らず、精密無比なる天秤を以て實際に微毫を測定することと爲つた。この試金術は朝鮮の砂金買入の爲、大阪協同會社に傳授せられ、後、臺灣銀行、長崎の十八銀行、朝鮮銀行等が各地に分析所を設置したが、その主任者は赴任前造幣局に於て實地に練習したものであるといふ。また舊韓國典圜局の創業は造幣局より機械を分讓し、その操業は造幣局より轉職せる人に依つて行はれたものである。其他壓印機械や天秤類の如きもので造幣局の指導によつて漸次改良を加へ、造幣局及海外造幣局で賞用せられてゐるものもある。

四

次に交通關係のことについて考ふるに、造幣局がやはり先鞭を着けて居る。造幣局から神戸における貨幣拂渡所たる東洋銀行(オリエンタルバンク)に轉送するため、運貨丸と稱する汽船を所有して貨幣その他の運搬の用に供した。また馬車鐵道もあつた。明治四年造幣局から與力町の北を經て福島より更に川口に至るものであつて、川口におけるオリエンタルバンク出張所に貨幣地金を運搬す

るためであつた。尤、局員の往復にも利用された。後に蒸汽機關車を英國から取寄せたが、諸品の運搬には其後多く水運を利用してゐたから、鐵道、機關車共に鐵道寮に讓渡したといふことである。尚、造幣局と川口との間には電信線が布設され、川口電信局で四年四月から電報を取扱ふこととなつた。これ等の設備も大阪では造幣局が先鞭をつけてゐるわけである。

五

更に他の方面について考ふるに、造幣局に於ては又夙に復式簿記を採用してゐた。之はブラガ(V. Braga)といふ葡萄牙人が教へたもので、原簿は今に存してゐるが英文のものと日本文のものとの二種の帳簿があつた。その帳簿も、活字もインキも勿論輸入されたものである。當時大藏省でも大福帳式であつたが、後に造幣局で學んだ人が大藏省へも入り陸海軍や會計檢査院印刷局等でも簿記をやるやうになつた。民間銀行等へもその技術が傳へられた。

また明治五年に日進學舍といふものが設けられてゐる。之は造幣局員及びその子弟に英語や物理化學を教ふることが目的であるが、局外のものも入學することが出來た。規則によると、英語科・算術科・小學科等があり、その外に幼稚園もあり女紅科即ち裁縫科もあつた。然し一般教育制度が定まつて以來は、私立學校として認可を受けてゐたものであるが、市中にも種々なる學校が出來たから、後には英語を教へることが主となつてゐたやうである。十四年頃には共學社、文學會などの研究團體も出來てゐた。この日進學舍が局員及び其子弟の教育に相當貢獻したこと、殊に英語とか物理化學とかの新しい學問を普及したことは忘る可らざる所であらう。

また造幣局の仕事振りを見るにその出勤時間や勤務時間が極めて正確であり、規律があつた。また現時の退官賜金や恩給の如き制度も(滿年賜金)當時既に採用され、職工の待遇、勞働條件等も一定の制度を立ててよく整つたものであつた。これ等の事柄も造幣局が最先きに模範を示したものといふことが出來る。

六

以上種々なる方面に亘つて造幣局に關係ある事業を述べた。造幣局の事業が我國貨幣制度の統一のために大なる效果を收めたことは勿論であるが、それ以外に於て以上述べし如き各種の事業、種々なる方面に重大なる影響を與へたものであつて、造幣局は實に新文明の策源地であつたのである。造幣局は今でこそ貨幣鑄造が主であり、金屬加工製品の外には大した事業といふものもなく、社會とは比較的沒交渉の地位に立つて居るけれども、開局當時は大阪には造幣局以外にこれといふ新智識の機關がなかつたから、造幣局は新智識の源泉でもあり、工業智識の供給所でもあつた。斷髮廢刀を第一に實行したのも造幣局なら、第一番に規定の洋服を着けたのも造幣局員であつた。何しろ日夕西洋人と机を並べ仕事場を同じうして居たから自然ハイカラになり易い。隨つて新らしい事は造幣局へ行つて聞けといふ風になつて居たから各方面から種々の相談を持ち込んで來たものである。工業上のことはもとより、鑛石の分析、機械の買入、及びその調査の如き、英語や簿記に關すること、其他新しいことは何に限らず相談にやつて來たものである。

開業當時大阪に於ては未だ他に之れあらざる大煙突が空中に聳立して黑煙を吐し出したことは如何に大阪の人々をして驚かしたことであらう。而もそれが新智識新技術の源泉となつて、大阪の今日を將來したのである。即ち造幣局が大阪の物質的精神的文明に貢獻したことは甚だ大なりといはなければならぬ。而もそれ等の新智識新技術が、やがて他の地方へも及んだものであるから、廣く我國明治の文化と造幣局との關係は甚だ重大なるものがあるといはなければならぬ。

七

造幣局は創業の際から多くの西洋人が奉職して居り、それ等のものから新智識新技術を受け入れたものである。一時外人の數は二十名に達してゐたこともあるが、その多くは英國人であつた。勿論それ等の人々の就職の時期は種々であつて一定してゐないが、段々邦人がその技術を會得するやうになり、次第に外人の雇傭契約を解除して來たが、明治二十二年頃には最早

外人技術者の姿を見ざるに至つた。即ち初め外人によつて傳へられた技術も今や日本人が十分に理解し、外人の力を藉らずとも十分にその事業を進めて行くことが出來、更に種々なる改良をも加へてそれ等の技術を全く日本化し自己のものとするに至つたのである。

この關係は我國一般の文化についても同樣である。抑も我國の文明は上古に於て支那朝鮮の文明を受け、或は印度方面の文化に浴し、最近また歐米の方面よりも文物を輸入して築き上げられたものであつて、若し外國文明の刺戟無かりしならんには、我國は果して今日の狀況にまで進み得しや否やは大なる疑問なりと考へらるる迄にその影響は甚しきものがあつた。維新以後西洋文化の强き影響を受けて、經濟上社會上大なる發展をなしたことはいふ迄もない所であらう。然しそれ等文明の輸入は單に外國文明を模倣せしのみではなく、模倣の中に自ら改造が行はれ、我國特殊の發展を遂げしものである。即ち外國の文明をよく咀嚼し改造して築き上げられたものが日本の文明であるが、このことは以上の造幣局の例を考ふるも同樣である。單に造幣局に限らず、すべての方面に於て新智識新技術を輸入すると共に、よくこれを咀嚼し同化し、我國獨特の事情を考慮して我國に適するが如くにこれを改造せなければならぬ。これは物質的文明についても精神的文明についても同樣である。かくしてこそ我國の堅實なる發達を期し得べきであらう。

附言。以上は極めて概括的に通俗的に述べたものであるが、他日更に詳細なる記述を試みたいと思つて居る。參考の資料は造幣局文書、世外侯事歷維新財政談(上)、造幣局沿革誌、久世喜弘翁、造幣寮の經營(上)等である。